理研会報

発行
印教研　理科研究部
事務局
成田市立成田小学校
成田市幸町948-01

《年頭挨拶》

一九九〇年を迎えて

印教研理科研究部部長　五味　健

遅まきながら年頭に辺りご挨拶を申し上げます。

いよいよ九十年代に入ったわけですが、日本のみならず世界的にも変動の年であり二十世紀を担っていく児童生徒を、どのような方向に育て伸ばしていくかは、我々教師に課せられた大きな課題でもあります。このような時期に、新指導要領も告示され、移行措置の実施を迎えました。

このような大きな変革の時期に当たって理科研究部は今、何をすべきか。そして、我々部員はどう対処しなくてはならないのか。

この問題は、一人ひとりが十分に時間をかけて考え実行に移さなければいけない事と思います。

現実の問題として生活科という新しい教科の設置に伴う低学年の理科の廃止と三年の理科にどう生活科を結びつけるか。それに伴う研究のあり方という新たな問題が生じるわけです。

低学年から理科という教科がなくなっても「自然をありのままに見る目と驚きを感じる心」を低学年から育てなければ、単に科学的な知識を詰め込む結果に終わる危険性があります。これを回避するためにも、研究部に所属する先生方ばかりでなく、すべての教師に課せられた問題として取り組んでもらいたいと考えます。

そのためには、小学校のみならず幼稚園の指導内容、そして中学校の内容にどう発展するかという研究が必要です。それは、形式にとらわれない創意あふれる発想に基づいた内容であって欲しいものです。反面、教育の個性化の前に教師自身のの個性化が問われるのも事実です。

抽象的な言い方ですが、日々の着実な実践研究が基本になりますから、可能なかぎりの努力をして欲しいものだと思います。

さて平成二年度は、印旛地区教育委員会連絡協議会指定の理科公開研究会が、四街道市立大日小学校で開催されます。ついては、先生方の積極的なご協力と参加をお願い申し上げます。

最後に、印教研理科研究部の行事もほぼ完了したわけですが、これもひとえに皆様の熱意あふれるご協力の賜と心から感謝申し上げます。今後ともよろしくご指導、ご協力をお願い申し上げまして年頭のご挨拶といたします。

研修報告

千教研八千代大会報告

小学校　物理領域に参加して
大室台小　吉野　信之

「自然とのふれあいを重視した理科教育」を統一テーマとして開催された千教研八千代大会。今回初めて分科会（物理領域）提案をさせていただいた。限られた時間での提案であったが、私にとっては内容の濃い分科会になった。

各支部からの提案は、次の通りである。

○船橋支部（船橋市立行田西小）
「電磁石を利用した
道具作り指導の工夫」

○東葛支部（野田市立柳沢小）
「考える力の育成をめざす
理科教育」

○君津支部（君津市立北小安小）
「意欲的に取り組む子を育てる
理科指導」

○印旛支部（大室台小・本校）
「情操豊かな児童の育成」
（四年ものの重さとてんびん）

分科会での質疑や指導・助言の中で、今後の研究指針としての大切だと感じたことが二つあった。次に、それを記し、大会報告とさせていただく。

（一）事象提示の工夫

児童にとって事象との出会いがその後の学習活動に大きく影響される。今回の提案も、導入段階で児童に強烈な印象を与える指導の工夫が多かった。この点について講師の先生より「インパクトを強くしすぎると、児童が次の学習で何が出てくるかと受け身の姿勢になり、自ら問題を見付け、解決しようとする主体性が薄れ、逆効果になってしまう恐れもある。」という内容の助言があった。日々の実践活動のなかで、十分検討する必要があると考えさせられてしまった。

（二）教材開発

行田西小の提案では、児童用のモーターを開発し、その仕組みを理解させ、電磁石を利用した工作に生かす工夫がなされていた。改訂指導要領でも、日常生活との関連を深める内容として、単元の応用・発展をねらった「～作る」活動が重視された。直接経験の重視の観点からも、今後の課題であろう。

中学校　生物領域に参加して
千代田中　片岡　勤

今回参加した千教研八千代大会から、私なりに感じたことを二～三述べてみたいと思う。

千教研当日、村上東中学校ではパソコンを利用した授業を見ることができた。

第一に、ありきたりの言い方ではあるが、二人に1台以上のパソコンが準備されているのには驚かされてしまった。本校の科学部の生徒の実情を考えて見れば98シリーズを持っている生徒が4人、88クラスになると2人いる。さらにMSXクラスを加えると、持っていない生徒は二～三名になってしまう。生徒の生活現状を考えると数をそろえることの大切さを改めて感じさせられてしまった。またパソコンの画面をOHPに投影する装置があるなど、機器の発達は教育の場に大きな変革をもたらしつつあるように感じられた。

第二にソフトの質と量である。一般の学校では自作ソフトを作っている余裕はとてもないので、市販ソフトをいかにたくさん準備できているかが問題となってくる。素人の先生方が多ければ多いほど市販ソフトが必要となってくる。村上東中では素晴らしかった。市販ソフトであれば、それほど抵抗なく多くの先生方がパソコンに接することができるのではないだろうか。

研究発表においては、印教研とは違い、個人研究的色彩が強く感じられた。私も印教研では取り上げられなかった「科学部の指導」について発表した。意外だったのは、大学の先生方等実際に生徒に教えることの少ない人々の反響が大きかったことである。来年度より選択理科が始まる。選択理科で求められている事は、私の提案した「科学部の指導」ということと全く同じであるといっても過言ではないと思っている。会員の先生方にも関心を持って考えていただけたらと思っている。